

胡堂賞

幸福に生きるとは

紫波第一中学校 1年 新聞 飛陽

私は、本を読むのがあまり好きではない。だから、学校から宿題として、読書感想文が出たとき、いやだなと感じた。でも、せっくなら普段読まない本を読みたいと思い図書館へ行った。すると、「14歳の君へ」という本が目にとまった。私は今、十二歳だ。だが、お金や人間関係、受験、仕事など、将来不安なことがたくさんある。今読んで損はないと思い、読んでみることにした。

著者は言う。「だって君は、幸福な人生を生きなくちゃならないからだ。」と。私は読んだとき、よく分からなかった。だから、自分なりに考えてみた。「人間として生まれてきたことが最大の特権。その権利を使わないなんてもったいない。」こう考えると分かりやすい。そう思うと同時に、深い共感がわいてきた。せっかくの権利は、ちゃんと使いたい。では、幸福に生きるためには、何をすればよいのだろうか。

まず一つは、個性的に生きること。強い人になれと言われたら、くじけないう人、あきらめない人など、具体的にイメージできる。だが、個性的になれと言われてもイメージが全然わからない。著者は、「個性というのは、自ら求めるものではない。」と言う。他人の評価で決まるものだ。だから私は、うそ偽りのない、ありのままの自然体の自分でいたい。それを他人はどう評価するのか。

次に、誰でも愛すること。「愛と好きは違う」このことを意識すれば、何か考え方や行動が違ってくるかもしれない。

私は、人に嫌われたくないと思っている。だから、人を好きになろうとした。自分が相手を好きになったら、相手も自分を好きになってくれると思ったからだ。でも、好きになろうと思ってよく見てみると、同時に苦手な部分も見えてくる。誰かの存在を拒んでいる自分が嫌だった。ちょうどそんなときに、この本に出会って考え方が変わった。「愛」は、好き嫌いを超えたもの。あの人は嫌いだけど、存在することは受け入れる。そう考えると、前よ

りずっと楽になった。別に相手の全てを好きにならなくてもいい。全員に好かれることなんて無理なのだから。と、楽観的にとらえることができた。少し、心の中に余裕が生まれ、相手に対してしっかりと向き合うことができそうに思えてきた。自分を、友達を、家族を、他人を愛することが幸福に生きるための一つのヒントだと、これを読んで考えがまとまってきた。

「言葉は時として凶器となる」こんな言葉を聞いたことはないだろうか。「あんたなんか死んじゃえ。」なんて言葉は、相手の心を深く傷つける。だが、その言葉は自分にも刺さっている。「刃物になった言葉が、自分の中で、自分を傷つけていないはずがない」と著者は言う。私もそう思う体験があった。

小学五年生のころ、友達から「けんかをしてしまった」と相談を受けた。その友達は、「腹が立ち、つい暴言をはいてしまった。」と言い、その後「でも、自分も痛かったんだ。」と言った。言葉で人を傷つけられるなら自分だって傷つけられる。私は、自分の言葉が凶器になって、相手や自分を傷つけないよう気をつけたい。人を愛することは、言葉を大事にすることでもあるのだ。

私は改めて思った。「では、幸福ってなんだろう」と。私は、「幸福は、自分自身が幸せだと感じること」だと思っている。お金がなくても、人間関係が悪くても自分の心が心地よく、晴れやかで楽しいならそれでいい。自分の幸せは、自分の心の「ものさし」が決めるもの。人との比較で決まるものではない。人の目を気にして、望んでもない、楽しくない生活こそ、不幸だと考える。私は今の生活に満足している。毎日が楽しい。だから今の私はきっと幸福なのだろう。

私の人生は始まったばかり。人生一〇〇年といわれる今、まだまだ先は長い。その長い人生を幸福に生きることが、人間として生まれてきた特権を最大限に使うことになる。私だけに与えられた特権をどのように使うか。それは、簡単ではないと、この本を読み、考えていくうちに思った。でも、今からでも幸福に生きるための努力はできる。あせらなくていい。一歩ずつでいい。そうやって幸せをつかめばいい。自分と向き合い、考えを見直す。そうするだけでも、人生は変わってくる。そう思って今を生きている。幸福な人

生はお金で買えない。理由は、それは既製品ではなく、一人ひとりのオリジナル品だからではないだろうか。しかし、だれかに頼んで作ってはもらえない。作ることができるのは、自分自身だけだ。

「あなたは今、幸福な人生を歩んでいるだろうか？」時々、自分に問い、確認したり、修正をしたりしながら「私の人生」を突き進んでいきたい。

図書名 14歳の君へ どう考えどう生きるか
著者名 池田 晶子

胡堂賞感想文について

審査員講評

“幸福な人生とは”このテーマに真剣に向き合
い幸せは自分の心の「ものさし」が決めるものと考
えた。

幸福に生きるために必要なことは自分をみつめ
一歩ずつ確実に歩むこと。人生の礎として評価で
きる作品だ。

教育長賞

今を生きる

宮城県古川黎明中学校 3年 横山 凜

五年前、曾祖母が死んだ。あまりに突然のことに呆然とするなか、こう思った。こうなるなら、もっと話しておけばよかった。こんなにも大切なのに。

海野雫は、まだ三十代という若さで、ステージⅢのがんになり、余命宣告を受ける。三十代という若さで、病気により命を落とす。今まで空想物の中にしかないと思っていたものが自分の身に起きている。治療さえしてしまえば元の身体になるという希望も、余命宣告によって消えた。想像するだけでも怖くなるようなことが彼女に起こっていた。それらは雫の心を絶望でぬりつぶし、嵐を呼び、荒らしていた。

そんな中、雫はホスピス「ライオンの家」のことを知り、入居する。そこには同じく死に向かっていく人たち、大好きな犬におだやかでやさしい島があった。そこで過ごしていくうちに、おだやかな心や、生きていくということの尊さ、美しさを取りもどしていく。

ある日、バナナを食べていた雫は、バナナの育ち方について疑問に思い、調べていた。バナナが木になっている画像を見て、この一本のバナナを作るのがどれだけ大変なことなのか、それでもたくましく生きていくことのすばらしさに気付く。房からものがれ、消えてなくなってしまう一本のバナナも、今を生きている。いつなくなってしまうか分からない恐怖と闘いながら、今もなお生きている。その気持ちを、雫は痛いほど知っている。バナナに自分を重ねてみていくなかで、一つのことに気付く。このバナナに与えられた愛情は消えることはなく、必ず誰かに受け継がれていく。全て無駄ではなかったのだ、と。病気によって失った生きることの美しさ、尊さを取り戻すことができた雫は、少しだけ死に対して寛容になる。その姿は、どこか生前の曾祖母を彷彿とさせるものだった。

この物語は、一貫して「生きていく」ということについて書かれている。作者は、今を生きるすばらしさを語っているが、私は、とあるもう一つのことを強く感じた。

それは、誰かといられる時間は無限ではない、ということだ。それがどれ

だけ大切だったとしても、その人とはずっと一緒にはいられない。だからこそ、その人との一瞬一瞬を大切にしていかなければいけないのだ。

昔の私は、それがよく分かっていなかった。何となく、今の暮らしが続いていくとどこかで思っていた。曾祖母のことも、何となくこれから先も生きていっていると思っていた。

本当に曾祖母が亡くなったのは、突然のことだった。年齢を考えれば、仕方なかったのかもしれない。ただ、そんなにすぐだとは誰も思わなかった。おだやかな春の日、私は祖母の家に行った。そこで曾祖母と話をしながら一緒にコタツで寝た。二時間ほどだった。その間に、曾祖母は帰らぬ人となった。起きてから、とても後悔した。気付いてあげられたら、と。

その後悔は、今も私の中に残っている。それは、これから先、何があっても消えることはない。このことで、私は気付いたのだ。大切なものとずっと一緒にいられるなんてことはない。だからこそ、一緒にいられる時間を大切にしていかなければならないのだ、と。

きつと、雫も、私と同じことを思っていたのだろう。自分が病気で命を落とす。自分を大切に思うだれかを残して、たった一人で。その苦しみを抱えながらも、生きる美しさや喜びを取り戻していった雫は、誰よりもこのことを分かっていると、そう思った。

雫は、強い人だと思う。若くして病気になり、死に向かっていくなかで、今を大切に思うことは、普通の人にはできない。荒れた心を癒し、立ち直り、死を受けとめ、今を大切にしていくと決めた雫の心は、強く芯はあるが、すべてを優しく包み込むような温かさを持っているように思える。そんな雫だから、六花も、島の人も、家族も雫のことを大切に思い、愛するのではないかと思う。

大切な人がずっとそばにいる訳ではない。でも、その人と過ごした時間、思い出が消えることはない。その人を忘れない限り、思い出の中で生き続けてくれる。だからこそ、今という一瞬を共に生きてくれる人のことを大切に、たくさん思い出を作っていきたい。

いつかはなくなる、今という一瞬を、そばにいてくれる誰かのことを忘れてしまわないように、思い出となるように歩んでいく。

優秀賞

それぞれのかけがえない命

紫波第一中学校 2年 小澤 落乃

「ある晴れた夏の朝」タイトルを目にした瞬間、私はこの本を手にとっていた。タイトルがとても印象に残ったのだ。なぜなら、原爆について描かれているように感じたからだ。私は、周りの同級生より原爆の知識があるように感じる。それは、私が被爆四世だからなのかもしれない。私の母は長崎県出身で、曾祖母は爆心地の近くで被爆したそうだ。長崎に住む祖母の家に行った際に、原爆資料館を見学した。そこで興味を持ち、広島にも行った。そういったことも重なって読みたいという気持ちが強くなっていった。

この本はアメリカに住む八人の高校生が原爆について肯定派と否定派に分かれて討論する様子を通じて、主人公や討論を聞きにきた人々の心の動きが細かく描かれている。八人の中には、日系アメリカ人やユダヤ人、中国系など様々な場所にルーツを持つメンバーがいる。主人公のメイは日系アメリカ人で否定派として参加している。原爆投下が正しかったか間違っているのか激しく議論していく。

印象に残ったシーンは、肯定派の一人が「被爆者たちが罪のない人々ではなかった。」と発言したところだ。この本を読む前は、私は日本の被害にばかりに注目してしまっていた。しかし、日本兵が中国の南京で多くの一般市民を殺してしまったことや、日本国内でそれを喜んでいた人々もいたのだから被爆者といっても「罪のない人々」ではないという主張だった。それを聞き、私は気持ちが激しく揺さぶられた。これまでアメリカに対しては、罪のない人々を巻き込みなんて酷いことをするのだろうという視点しかなかったからだ。日本の加害については何も知らなかったことに気づかされた。

もう一つ考えさせられたことがある。

「安らかに 眠って下さい 過ちは 繰返しませぬから」この言葉は、原爆死没者のための慰霊碑に刻まれている言葉だ。私も実際にその場に行き、目にしたことがある。この慰霊碑に刻まれた言葉は「日本人だけでなく、世界に人類でもある」と考えている主人公の言葉がとても心に残っている。この

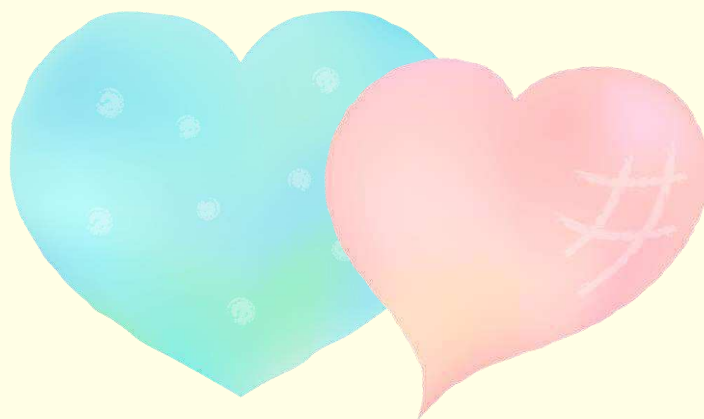
ことから、私は、現在の世界のことを考えてみた。今年は、原爆投下から七十八年が経つ。被爆者の方々も高齢になっている。被爆者の方々の中で、その経験を私たちに伝える活動をなさっている方々がいる。被爆者の方々を経験を伝えてくださっている間もなお世界では何か国も核を保有し続けている国がある。それはなぜなのか疑問が湧いてきた。ヒロシマ・ナガサキで犠牲になられた人のことは忘れているのだろうか。核を持ち続けているということは、一瞬にしてたくさんの命を奪ってしまうということである。想像しただけで、私は恐怖を感じてしまう。こんなことが二度と起こってはいけな
いと思う。「過ちは繰り返しませぬから」という言葉の意味を私自身、考えていかなければならないと思う。

また、「それでも私は愛する」という言葉が忘れられない。イスラエル軍の撃った砲弾によって家族を亡くしたパレスチナ医師の言葉である。憎しみと怨念の連鎖、暴力と暴力の連鎖を断ち切るためには互いに相手を許すしかないという考えである。「相手を許し、愛さなければならない」というものである。悲しみが強いはずなのに感情で動きたくなる自分自身を止め、これからの未来を考えて相手を許す決断をくだせる人もいるということに衝撃を受けた。

私はこの本を読み、迷路にはまってしまったように感じるがあった。一つの国の考えを尊重して行動に移したり、移されたりすると、他の国は犠牲になってしまうのではないかということだ。また、多種多様な人々がいるこの世界で全員が納得して合意形成していくことはとても難しく、不可能なことなのではないか。これからの世の中はどうなってしまうのかと考えてしまった。しかし、大切なのは、初めから敵対視するのではなく、両者の目的や願いを達成するために少しでも歩み寄るということではないのだろうか。「命」という何にも代えられないものを守ることを大前提として、人々が笑顔になれる世界へと舵をきっていきなと思う。私ができることは、原爆のこと、そして日本がその前後にしまった加害についても知ること、そして考えていくことである。一つの視点からだけでなく、多様な視点から物事を見ていきたい。自分と全く違う考えを持っている人も世の中にはたくさんいる。そういった人々の意見を最初から否定せず、よく聞いてみることに

そうすることで、自分自身にはなかった考えに気づくことができるかもしれない。多面的多角的な視点から物事を見ることで、正しい判断ができる自分に近づくことができるのではないだろうか。一人ひとりかけがえのない命をもっている。私は、その命ひとつひとつが等しく尊重される世界を目指していきたい。

図書名
著者名
ある晴れた夏の朝
小手鞠るい



入 選

中村さんが本当に伝えたかったこと

紫波第一中学校 1年 浅沼 泰知

「いつもファンタジーやフィクションしか読んでこなかったから、今回を機にノンフィクションのような現実に偏った本を読みたい。」と司書さんに相談したとき、司書さんが取ってくれたのが、この『わたしは「ゼロ弾きのゴーシュ」』だった。「ゼロ弾きのゴーシュ」は宮澤賢治の物語。「わたし」である中村哲さんがこの物語を通じてどんなことを伝えたかったのか、読んでみることにした。

この本は、NHKの「ラジオ深夜便」でインタビューに答える中村さんの声を本にしたものだ。中村さんは、パキスタンやアフガニスタンの貧しい山岳地帯でハンセン病患者など多くの命を救った医師である。また。水不足に苦しむ人々に井戸を掘り、飲み水の確保や農業などに三十五年間も尽力された。しかし、二〇一九年、アフガニスタンで銃撃され亡くなった。

この本を読んで僕は、まず中村さんが答えた言葉に衝撃を受けた。それは「大千ばつにより二〇〇〇年には家畜の九割が死滅、四〇〇万人が飢餓線上にあり、しかも一〇〇万人は餓死線上にある」ということだ。現在の岩手県の人口は一〇万人。そう考えてみるとこの大千ばつの恐ろしさがとてもじゃないほど伝わってくる。アフガニスタンへの知識がない僕は、「大変なんだろうな。」くらいの感覚で読んでいたが、事の重大さがわかってきた。日本の学校では給食が出て、食べて、当然のように残している。しかし、これが当たり前ではないとわかり、食事への感謝の気持ちと、当然のように残してしまうことに対して心が痛くなった。このままでは大変なことになってしまう。

中村さんは、千ばつ問題、地球環境問題には、わたしたちの想像力を超えるものがあると言う。これまで人々が平和に暮らしていた地球があつという間に砂漠化して人が住む空間が次第になくなっていくという恐怖感。これはもう戦争どころではないとも中村さんは言う。僕も今住んでいる紫波町が砂漠になり、住めなくなってしまう。そう考えると怖くて苦しくなった。中村

さんが現地で医療活動だけでなく、水源の確保、用水路の開通にまで努力された理由が少しずつ見えてきた。現地での干ばつ問題に加え、社会問題に触れながら引き下がらずに現地で活動が続けてきた中村さんは、本当にすごい。僕だったら、現地に行っても今ある問題の多さに後ずさりして何も行動に移すことができないだろう。この行動力はどこから出てくるものだろう。

「二十年間の活動の背骨を支えてきたものは何ですか。」という質問に対し、「もうどうにもできないことであれば仕方がないけれども、自分が出て行けば何とかなるんじゃないだろうかという状況のときに、そこで引き下がるかどうかの問題で、引き下がれなかったもんですから。」と答えた中村さんを、僕はすごくかっこいいと思った。

「『セロ弾きのゴーシュ』というのがありますね、宮澤賢治の童話で。それに近いんでしょうね。」とも中村さんは言った。アフガニスタンに行って用水路を作り、井戸を掘り、ハンセン病の根絶を目指して行動して、「別にわたしに立派な思想があったわけじゃないんですね。」と言う中村さん。この言葉にすごく体の中が熱くなった。そして僕は、中村さんのことが好きになった。

この本を読み始めたときは、中村さんのことも知らず、世界には何百万人もの人が今を生きるのに精一杯だったり、餓死線上にいたりすることも知らずにいた。しかし、この本を通じて中村さんと出会い、医師としていろいろな形で人々の命を守る生き方を知った。

セロの演奏が下手でいつも楽長に叱られていたゴーシュのもとに、猫やカッコーをはじめ、様々な動物たちが毎晩のように訪れる。いろいろな理由を付けてはゴーシュに演奏を依頼する。迷惑に感じながらも断れないゴーシュは練習に付き合ったり、自分の演奏で野ねずみの病気を治したりする。毎晩動物たちと触れ合う中で、ゴーシュは知らないうちに、セロの演奏が上達していく。僕は、中村さんとゴーシュの共通点は、困った人をどこまでもほっとけないことなのかなと考えた。ゴーシュも中村さんも、その時の状況に合わせて、一つ一つ地道にやっていったことが、大きなことにつながったのだと思う。「今できることを一つずつ丁寧にやっていくことが結果につながるのだ」ということを伝えているのではないだろうか。

僕は中村さんの生き方から、大変な問題でも自分のできることを考えて、まず実行してみることを学んだ。僕はこの後に生徒会役員選挙が控えている。今、自分のできることを一つ一つ取り組んでいきたい。

図書名

著者名

わたしは「ゼロ弾きのゴースト」
中村哲が本当に伝えたかったこと
中村 哲



入 選

わたしの気になるあの子

花巻市立湯本中学校 3年 伊藤 成末

この本を手に取り、はじめの紹介文を読んだとき、「ふつうって何だろう」と考えさせられた。興味をひかれ、読み進んでみたいと思った。

この物語は、主人公瑠美奈と同じクラスの転校生である詩音という二人の女の子の話だ。いつもはとても静かだが、ある理由で突然坊主頭で現れた詩音と、おじいちゃんがなかなか理解してくれずぶつかる瑠美奈。その二人がジェンダー問題について考えていくストーリーだ。

詩音が突然坊主にした理由、それは詩音の姉、香穂がきっかけだった。香穂が転校した学校は、前の学校よりも校則が細かく、多くの生徒が悩まされていた。香穂は、個性を尊重するとか、多様性を認めるとか言っておきながら、そんな校則があるのはおかしいと思っていた。そして、反抗の意味も込めて、坊主にした。その姿を見た詩音も坊主にし、姉妹そろって坊主になったのだ。私は二人の行動力にはもちろん、さらに香穂の考え方にすごく共感した。特に、周りの生徒が悩んでいる姿を見て、みんなのために少しでも変えようとしているその思いに心が惹かれた。私の学校でも校則があるが、昔は今よりも厳しかったらしい。しかし先輩方の努力もあり、今は好きな髪型をすることができている。校則に縛られすぎず、自由な髪型にするために、ただ文句を言っているのではなく、自分に出来ることを考え実際に成し遂げてしまう香穂の行動力に心が動かされた。

詩音は坊主になったことで、学校で男子にからかわれるようになった。先生にも、もっと女の子らしい、ふつうの髪型のほうがいいと言われた。詩音は、先生までと、傷ついたと思う。その話を知った瑠美奈は、詩音の思いを理解したいと思った。瑠美奈は大体ズボンをはいている。祖父はその姿を見ると言う。もっと女の子らしい服にきなさいとか、スカートをはきなさいとか。瑠美奈は古い考えの祖父に否定され、反感をおぼえていた。

私はこの瑠美奈にもすごく共感できる。私も保育園のときから今まで、髪が短く、小学生のときは刈り上げまでしていた。さらに服も男子っぽい服だ

った。お店に行くと、よく男の子に間違えられていたし、親戚の方々にも、初めて会う人には、いつも男の子だと思われてしまう。それでも私は、髪が短い方が自分らしくいられる気持ちになれる。私の家族も友達も、

「すごく似合ってる。かっこいいよ。」

とほめてくれる。でも、瑠美奈は服装を祖父に否定されてしまった。自分の好きな格好・髪型などを、否定されるのは、ましてや家族に否定されてしまうのは、とても悲しいし辛いと思う。

私はこの本を読んで、二つの大切なことに気づかされる。一つ目は、主人公・瑠美奈と詩音の二人の行動力からだ。家族である祖父に反対されても、先生に反対されても、自分らしくいるために、また、多様性社会にしていこうために、今の自分に出来ることを見つけ行動しようとする。そんなところが大切だと思った。私も、自分の意志をしっかりと持ち、そのために自分に出来ることを見つけ挑戦してみたいと思う。

二つ目は、二人のジェンダーについての考えからだ。男だから、女だから、子供だから、大人だから……。こうするのが「ふつう」だ……。そういった固定観念に縛られて生活するのは変だという考え方を教えてくれる二人の主張。私はこの考え方は、これからの時代を生きていくうえで、ますます大切になっていくと思う。固定観念にとらわれすぎないで、誰もが自分らしさを発揮できる社会。そんな社会になると、きっとみんなが自分らしく楽しく暮らすことができるようになるのではないかと私は思った。そのために、「ふつう」を簡単に人に押し付けないで、これから私もいろいろな広い見方で生活していきたい。

図書名 わたしの気になるあの子
著者名 朝比奈 蓉子

入 選

たった1%のリーダーのコツ

花巻市立湯本中学校 3年 瀬川 暁之介

僕は普段、リーダーについてあまり考えていなかったにも関わらず、この本を手に取り読んでいくうちに、リーダーという概念が変わり、リーダーは人格でなく役割であって、プレッシャーを抱える必要はないのだとわかりました。筆者は、河野英太郎さんという、東京大学の文学部を卒業した方です。大手広告会社に勤務していた河野さんが、リーダーについて解説しています。これからの学生生活、社会人生活に向けて、どのような行動をとるべきかを、この本を通して発見し、考えることができました。

この本を読んでみて、気になったところや感心したところが合わせて四つあります。

まず一つ目は、リーダーとして周りを説得するときには、「感情を添える」ということです。人が「なぜそのようになるのか」などの疑問を持ったとき、その答えは「理論・理屈」につながっていきます。ですが、理屈を踏まえた上での「感情」が、人を説得するときにとっても大切だということです。例えば、普通に「これをお願いします。」と言ったのと、一生懸命に「これをお願いします！。」といったのでは、後者の方が頼まれた側も行動に移しやすくなります。もちろん、感情だけで物事を進めてしまつては、具体性がなく説得力が低下します。僕の経験だと、急いでいるときに、「これやってくれない？」と頼んだら、相手に「はい、はい。」と面倒くさそうに返されました。あのときにもう少し具体的に「なぜ今、やってほしいのか」を説明し、そしてどうしてもお願いしたいのだという「感情」を取り入れればよかったと、今は思います。

二つ目は、一つ目と真逆で、「感情的にならない」ということです。感情を入れた方がよいけれど、過度になってはいけないということです。それは、感情コントロール、すなわち、操作Ⅱ調節ということです。例えば、何かトラブルが発生したとします。その時、冷静に行動するか、大声を出して慌てるかのどちらを選ぶべきか。リーダーとしては、前者の方がふさわしいです。

自分の経験だと、大切な物を紛失してしまったとき、パニックになってしまい、家族まで一緒に探すハメになり、迷惑をかけてしまったことがあります。そのときにもっと冷静に判断し、まずは自分で黙々と探していればよかった……。と後悔しました。だから、目的達成のためには、感情をコントロールして、むやみに表に出さず理性を大切にすることだと思いました。

三つ目は、「ため息をつかない」ということです。人は嫌なことがあると、「ハア」と下がり気味でため息をついてしまうものです。例えば、体育祭のリーダーが、弱音を吐いてため息をついて、舌打ちなどをしていると、感じが悪くマイナス思考なのが後輩にも移ってしまい、状況が悪化してしまいます。自分の経験だと、テストが返却されたとき、自分的にはあまり納得のいく点数ではなくて「ため息」をついてしまったことがあります。すると、自信がなくなりよいことを考えることができなくなってしまいました。だから、悪いことがあっても、「ため息」を「深呼吸」に変えて、精神統一をして落ち着いて考え、次の行動に移していきたいと思います。

四つ目は、「完璧であろうとしない」ということです。リーダーになると誰しも「完璧でなければ！」と強い決意でプレッシャーを感じてしまうものです。僕の経験からすると、中学二年生になったとき、班長に立候補したことがありました。しっかり頑張ろうと責任を感じたプレッシャーで、最初は失敗ばかりしていました。それから学んだことは、責任を感じることはよいことだけれど、それを感じすぎてプレッシャーになると、失敗などにながってしまうということです。

今の学校生活で、リーダーとなってもならなくても、いずれリーダーの立場になり、リーダー性を発揮しなければならないことがあると思います。そのために、自分にとって何が一番足りないのかを見つけることができました。それは、「冷静さ」です。物をなくしたとき、ため息をついているときは、「落ち着く」ことができずにパニックになっていました。僕が部活動で取り組んでいたソフトテニスの試合と同じように、緊張（プレッシャー）はかかっていいけれど、少しの緊張で、後は冷静になって勝つための戦略を考えて実行するという流れが、将来社会に出てからも活用できると思います。これからは、「冷静さ」を意識し、胸に刻んで生活していきたいと思います。

そして、「完璧であろうとしない」で、役職の有無に関わりなく、リーダーとしての目線で、成功も失敗も、たくさんの経験を積んで成長していきたいと思います。

図書名 たった1%のリーダーのコツ
著者名 河野 英太郎



入 選

多様性とは

紫波第一中学校 3年 高橋 瑠奈

自分が信じる「正しさ」は誰かにとっての「暴力」になりえる。自分が認識している世界の狭さを思い知らされた。日常で感じていた「普通」という言葉の重さがここにある。

「多様性」という言葉が認められるような世の中になり、私もなるべくあらゆる人のことを理解したいという思いを持っていた。そう思っていた。しかし考えてみれば、そもそも「許す」「受け入れる」という考えがある時点で傲慢ではないか。きっと、心のどこかで自分が正しいと思い込んでいるのだろう。だからといって「自分は正しい」と声を上げることもできない。なぜなら、本当に自分が正しいのか、自分ではわからないから。

私は、好きな本や音楽を聞かれたとき、相手によって答えを変えることがある。思い浮かんだ好きなものを伝えても、相手には良さがわからないだろうと思い、大多数が好きな定番の答えを選ぶ。というよりも、相手に合わせて共感してもらえそうな答えを探す。そうするのは、合わせたほうが楽だし、自分が安心したいからだと思う。

物語の名は「正欲」。

この物語の前半は、不登校になった息子をもつ検事の啓喜、布団売り場で働く夏月、大学の学園祭の実行委員を務める八重子の、三人の人物の視点で進んでいく。この三人は一見何の関わりもないように見えるが、啓喜の息子が、同じような不登校の友達と動画配信を始めるところから、少しずつ三人の関係が繋がりは始める。そして後半では、夏月の中学の同級生であり、何らかの秘密を共有している佳道、八重子が思いを寄せているイケメン大学生の大也の、新たな二人の視点が加わり、物語が進んでいく。多様性から外れた特殊な人々が抱く社会からの断絶感や、「多様性」という都合のいい言葉では表現できない世界が描かれている。

「多様性を認める」という言葉には、考えなければならぬ課題が隠されている。夏月は多様性について、「都合よく使える美しい言葉ではない」と

語った。私たちは普段、「多様性」という言葉を「良いもの」として使っているが、夏月の次の一言に表れているのは多様性から非難された人の深い絶望だ。

「なんで世間が言うマイノリティにすら当てはまらないんだよ」

この物語は、読者一人一人の中に潜む課題を明らかにし、「ではどうすればよいのか」と問うていると思う。この問いに対する答えを出せないのなら、「多様性」という言葉を容易に使うことはできない。

「みんな違ってみんないい」と主張される世の中が生きにくい人もいると思う。少数派の人に「あなたは人と違うんだよ」と言っているようなものだ。誰がどういう「欲」を持っていたとしてもその人にとってはそれが「正」しい「欲」なわけで、それを人にも理解してほしいか、ほしくないかもそれぞれの自由だ。そうやって、無理にお互いを理解する必要もないのではないか。

この作品は、社会というものが、同じ欲を持つ人同士の連帯で成り立っていること、それゆえに社会との繋がりも、持っている欲が同じということによってのみ生まれるということを指摘している。社会が同じ欲を持つ人同士の連帯だとしたら、人と異なる欲を持つ人は、通常のルートから大きく外れた人であり、この世のバグとみなされてしまう。そのような、社会から排除された人々が、なんとかして社会との繋がりを得て、「明日死にたくない」ようになる。そういう物語だと思う。

そういった意味では、全体を通して希望が垣間見える前向きな物語だと私には感じられた。特にラストの、「いなくならないから」という言葉は、これまで社会から孤立していた夏月と佳道との間に、強い繋がりが芽生えた瞬間だと感じた。

「正欲」は、多様性を尊重すること、人と分かり合うことがどれほど難しいことを考えさせてくれる作品だ。「まともって、不安なんだ。正解の中にいるって、怖いんだ」という佳道の言葉が、頭の隅に残っている。自分はまだでもある、多数派である、と思っていることもまた、怖い事なのかもしれない。

この本を何度も読み、必要なのは「対話」だと感じた。その一つのきっかけとして、この小説「正欲」が疑問を投げかけ、読者がこの作品と対話して

いくことで、世間の多様性の捉え方は変わってくるのではないか。多種多様な人間が生きていくうえで、考えるべき問題を投げかけてくれる小説だ。

これからも人類は新しい概念を次々と生み出してくるだろう。しかし、それは本当に意味があることなのか、自分で判断しなくてはいけない。そんな時、この本を読んだ経験が物事の本質に、私たちを近づけてくれるだろう。

図書名 正欲
著者名 朝井リョウ

